

公爵一族の
御令嬢に
転生？

努力が報われる異世界で、可愛いもののために本気出します

2

Hetamaro
へたまる

ill. 千道センリ

登場人物紹介

◆ クリント ◆

エルザの異母兄弟。
誕生日も同じで、
何かと張り合いがち。

◆ ダリウス ◆

エルザの婚約者で、
ステージア王国の
第一王子。

◆ ハルナ ◆

エルザが幼いころから
見守っている、
レオハート家に
勤めるメイド。

◆ レイチェル ◆

とある子爵家の令嬢。
美味しいものが大好き。

◆ ソフィア ◆

珍しい聖属性を持つ少女。
平民なのにエルザに
迫られてタジタジ。

◆ エルザ ◆

前世の記憶を持つ本作の主人公。
公爵である祖父や
家族に愛されつつ、
自由気ままに過ごしている。

◆ カーラ ◆

とある伯爵家の次女。
もとは身分至上主義
派閥だったが、
すっかりエルザと仲良しに。

第一話 ウール商会

私はエルザ・フォン・レオハート。

ステージア王国の公爵こうしやの一人であるレオハート公爵を祖父に持ち、さらに前世の日本での記憶を持つている。そう、いわゆる異世界転生者というやつだね。まあ前世の自我がややふやなので、記憶に近いものなだけだ。

そんな私は、幼い頃こころから魔法や剣の訓練を続け、今では英雄と肩を並べられる、レベル三百を大きく超えていた。

そう、この世界はゲームよろしくレベルの概念があつて、それに気付いた私はレベル上げにどっぷりとはまってしまった。

さらには、国内最高レベルに到達したおじいさまに鍛えてもらったのだから、戦闘技術もそれなり以上にある。

それから、姿を偽って冒険者としても登録して、おじいさまと一緒にダンジョンに潜ったり、前世の知識を活かして公爵領を発展させたりと、異世界生活を楽しんでた。

とはいえ公爵一族の令嬢れいじやうとは言ったものの、父様が伯爵はくやくなので、正確には伯爵令嬢だけだね。

ともかく、貴族令嬢として、遊んばかりもいられない。自分のためにも。そうやって、いいところのお嬢様として奮闘しながら年月を重ね十二歳になった私は、王都にある貴族学園に通うことになった。

同じ年の異母兄弟クリントや、珍しい聖属性を持つソフィアと一緒に学園に通い始めた私は、レイチェルやカーラという友人もできた。それと、この国の第一王子にして私の婚約者であるダリウスも、一学年上だけど同じ学園に在籍しているので、たまに顔を合わせている。

そんなこんなで、学園生活を楽しんでいるんだけど――

「まさか、王都でお嬢様とお会いできるとは」

「はは、知って来たくせに。それよりも、今日は何を見せてくれるのかしら？」

私は王都のレオハート邸の一室で、一人の男性と対面していた。

「いえ、この度は拝謁の機会を賜りまして、誠に感謝いたします。道すがら手に入れた面白い物をお持ちいたしましたので、是非ご覧いただければ恐悦至極でございます」

「回くりどい挨拶はいいから、お掛けなさい」

礼儀正しく挨拶をしてくれた彼に、愛想よく応えて席に着くと、すぐにハルナがお茶を出してくれた。

私はそれを一口飲んでから、彼にも勧める。

「どうぞ」

「お気遣い、ありがとうございます。ふう……相変わらず、美味しいお茶ですね」

私に続いてお茶を口にして出た彼の言葉に、ハルナが少し嬉しそうに頷いたのが視界の端に映る。質のいい服に身を包んで小綺麗にしている目の前の長身の男性は、チャド・ウール。レオハート領でも、とてもお世話になっているウール商会の商会長さんだ。

チャドさんは後ろに撫でつけた緑の髪の毛を手で押さえながら、ハルナに一礼してからお茶を口に運んでいた。

ちなみに、あの緑色の派手な髪の毛は自前じゃないらしい。別に禿げてるわけでもないけど、彼は被り物が好きなのだ。会う度に髪型が大きく変化するレベルで。

そのため、髪の毛は綺麗に剃髪されている……仏教徒でもないのに。

着ている服も、やや装飾が華美なものが多く、胡散臭い雰囲気はある。おしゃれに関しては、個性的と言うしかない。今まで見てきた彼の服だけでも、パリコレもどきができそうなくらいに何度も会ってきた相手だ。

「まずはこちらを」

「あら、何かしら」

チャドさんが差し出した箱を開けると、小さな赤い光が揺れる宝石だった。

これは……

「ついに入手できたのね？」

「ええ、火属性ではなく火の魔法そのものを閉じ込めた人工魔石です」

目の前にあるのは、魔法を閉じ込めた魔石。

魔石というのは、魔力を蓄えることができる鉱物だ。

魔物の体内からも出てくるから結石のようなものかな？ それはそれで、ちよつと嫌な気持ちになるし触れたくなくなるから、鉱物に分類しておこう。実際に地中や、鉱山からも産出されている……化石とも言えるかもしれないけれど。過去、ドラゴンが住んでいたとされる場所では、大きな魔石がよく採れるみたい。化石になるくらい昔なら、恐竜の魔物とかがいてもおかしくないしね。そして目の前の魔石には、魔力ではなく魔法が込められている。

ここに込められた魔力を外に放出するだけで魔法が使える逸品だ。

しかも、魔力を充填すれば何度でも使えるようになっていくという。

前世で言う銃火器のようなものだね。盾にこの魔石を埋め込めば、歩兵ですら魔法の斉射ができるようになるだろう。

そんな魔法を込めた魔石は、作り手が少なく、とても希少なためほぼ市場に出回ることもない。製法は一部のドワーフのみに受け継がれているらしく、とても高価な品なのだ。

過去、多くの人族の研究者たちが製法の解明に努めたが、結局は無駄に終わったとか。

そもそも魔石を加工する段階で、外側に傷をつけることなく中に魔法を込めるとか、とんでもな

く難しいことをやっている。物理的に魔石の中に何かを入れるのは無理だけれど、魔力は込められるから、そのあたりにヒントがありそうなんだけれどね。

ともあれ、これが大量生産できれば、戦争の概念が変わってくるわけだが、そうはなっていない。まだ結果として、よかったと言えるよ。だって、こんなものの開発が進んで、大規模殲滅魔法とかを普通の歩兵が使いだしたら、世界が滅ぶし。

さて、私がなぜこんなものを欲していたのかと言うと……それは、ソフィアや孤児院の護身用には思っていることだ。

私やレイチェルクラスだと、息をするように魔法が使えるから無用だけど、彼女たちはそうじゃないから。

だから、これで作ったペンダントを胸に忍ばせておけば、不意に襲われても魔力を込めるだけで胸からファイアーが発射できる。孤児院のドアに着けておけば、不審者がドアの前に立った瞬間に……

あとは、浮遊魔法を込めれば、高所から突き落とされても「親分！ 空から人が！」程度で済むしね。

とりあえず、さすがはチャドさん。優秀な商人だ。まさか、本当に手に入れてくれるとは。

「どうやって……とは、聞かないでおくわ。とりあえず、言い値で買いましょう」

「では、金貨十三枚で」

金貨十三枚。日本の物価の感覚でいくと、百三十万円か。

魔力を込めるだけで、誰でも魔法が使える魔石の値段としては安い気がする。

あーでも、これは炎の魔法が込められてるんだっけ？

もしその効果が、お寿司屋さんや鉄板焼き屋さんが使ってるような、肉や寿司をあぶるようなガスバーナーくらいとしたら高すぎるけど……火炎放射器くらいの威力が出るとしたら、どうなんだろう？ 兵器になるような火炎放射器の値段は知らないけれど、除草用のバーナーは十万円もしなかったはず。

それと比べるとやっぱり高いけど、それでもこの世界での珍しさを考えたら、百三十万円でも安いだろう。

……百三十万円が安く思えるなんて、私もだいぶブルジョワ感覚に馴染んでみたい。

ともあれ、この魔石が金貨十三枚は安すぎる。何かあるに違いない。

「二十枚出すわ。随分と奮発してみたんだけど、私に何か頼みたいことでも？」

「お見通しですか。仕入れが金貨十二枚なので、利益はあるのですけれどね。頼みたいことというよりも、ここでもレオハート領と同じようにお付き合いさせていただければと、ご挨拶がてらにお持ちした次第です」

「手土産つてわけね。まあいいわ。それよりも、こちらが頼みたいことがあるのだけれども」

「なるほど、それで金貨二十枚というわけですか」

このチャドという男、本人も行商をしているのだが、従業員にも定期的に行わせている。

従業員に関しては、一定数の商品と現金を渡して、それを増やして帰るようになるという修行の旅を兼ねさせているとか。

もちろん、経験を積んだうえで厳しい審査を通過しないと、その大役を任されることはない。荷馬車ごと持ち逃げされたら、たまったもんじゃないからね。

仮にそうだったとしても、彼のことだ。地の果てまで追いかけて、取り立てることだろうけど。

ただチャドさんが行商を行うのは、趣味と実益を兼ねた息抜きらしい。各地の情報収集のためと、商品を買ったお客さんとの直接のコミュニケーションのためとか。

そのため、行商のときだけは目立ったり、住民に警戒されたりしないよう地味な格好をしているらしい。

本人と従業員が各地に飛び回って、上手く住民に溶け込める商会だからこそ、今回の頼みごとの相手にはもってこいなのだ。

「その、頼みたいことというのは？」

「ええ、情報を流してほしいの」

「ほう？」

「ギリー伯爵領の村や集落に寄って、レオハート領が移民の受け入れキャンペーンをしていると」

「キャンペーンですか？」

「ええ、お得なサービスを提供する機会のようなものね」

私の言葉に、チャドさんが首を傾^{かし}げている。

髪の毛がずれるよ。いや、もうずれてる。心情を表してるみたいで、面白いことになってるよ。

ところで、なぜ私が唐突にこんなことをするのかというと、この間、ギリー伯爵令嬢が食堂で散々と平民のソフィアをこき下ろしていたのを見たからだ。

そんな身分至上主義派である彼女の領地には、庶民が住むのは相応しくないとと思うんだ。

だから、少しでも彼女にとって目障^{めざわ}りな者を減らしてあげようと、善意から領民を引き取ってあげることにしたんだよ。

領民はうちで安定した生活を送れるし、彼女たちは目障りな庶民を見なくて済む。うちは働き手が増える。

ギリー伯爵家を売り手、うちを買い手、領民を世間と考えたら、まさに三方よしだね。

私のお願いに、チャドさんが目を細める。

「詳しい内容を、お教えいただけますか？」

「まず、うちの当たり前の情報からね。うちは、税金は収入によって変わるけれども、小規模農家に關しては三公七民で一律。そして開拓民は初年度の納税義務はなしで、その後開拓地となる集落が村として認められるまでは二公八民……というのはウール商会長も知ってるよね？」

「ええ、うちの商会でも、商人が肌合わなかった者がお世話になっておりますからね」

チャドさんの言う通り、ウール商会をやめて、うちの領地で暮らし始めた人も多い。

そう、うちの領地の税金は他所^{よそ}に比べると、かなり安いのだ。

理由としては、特産品が豊富なのと、領民が多いこと、さらには大規模農家や大手商会の関係者等の高額納税者の存在がある。

他に、私自身がおじいさまと一緒にお金を稼いでいるのも大きい。冒険者稼業以外でもね。

あと数年前から、領内の富裕層の方で、生活が豊かになったから感謝の気持ちと、さらなる領地の発展のために使ってほしいと言って、お金や物資を寄付してくれる人が増えてきている。

それならばと、寄付金は自主納税扱いにして、税収として記録することにしたわけだ。

それと、自主納税には金額によってお礼の品を渡すようにもしたんだよ。

最近、返礼品目当ての人も増えてきたのかもしれないけれども、馬鹿にできない収入源だったりする。

返礼品といっても、私たちからすれば本当に大したものじゃない。

冒険者稼業で得たレア素材のオークションの参加券だとか。冒険者体験ツアーだとか。冒険者ギルド倉庫の在庫整理販売会の参加券と金券とか。

冒険者のことを馬鹿にしている金持ちたちも、実は彼らの実態には興味があるのがよく分かった。本当はやってみたいのだからうけれども、立場上できないから、やつかみもあるのかもしれない。

私も、おじいさまも立場的には駄目なんだろうけど、第一線級でやらせてもらってるからね。

……これ、他領の富裕層からも時折、自主納税という名目なのに寄付をしに来ることがあるんだ。その、一部の貴族とかからも。だから、税収に関しては、かなり潤っているのが実情だ。

そういうわけで我がレオハート領では、ないところから無理に搾り取ることはしていないのだ。「それで、移住の話ね。他領から農家として移住してきた場合、最初に与える整地された土地は、百五十平米で考えてるわ。それ以上はその周りを開拓してもらうしかないけど。あと住宅に関しては、最初は集合住宅のようなものを提供する。一つの建物にだいたい十家族程度は住めるけど、壁でしっかりと区切つてあるし、家族向けのものはそれぞれに大部屋一つに小部屋が二つもついているわ」

この国の単位だとヘバーとなるらしいけど、そこは生まれたときから持っている翻訳スキルさんが仕事をしてくれているから大丈夫だ。

言語に関しては、本当にザルだなと思うことが多々あるけど、言っても仕方がない。都合のいいスキルなんだろう。知らない物でも、翻訳されて意味が理解できるようになるのとかチートすぎるけど。

そして、私が用意した集合住宅は、アパートのようなものだ。

今回用意するのは平屋だから、見た目は長屋っぽいけれども狭いということはないはずだと思う。

「なかなか、広い土地をもらえるんですね。それに住むところまで」

「もちろん！ キャンペーンですから」

私の言葉に、チャドさんが笑顔で頷いている。

チャドさんは基本、私に好意的なのだ。きつと、私が上得意様だからだろう。決して、児童愛好者ではないはず……見た目は怪しいおじさんだけれども。

そのまま、私は話を続ける。

「さらに二年間は税率を二公九民で、二年目の終わりにまとめて徴税することにします」

「ということは、実質初年度無料で、二年目に収穫の二割の税を納めるということですね」

ふふ、これはかなりお得だと思う。

これだけの条件が揃えば、移住もしやすいだろう。

「あとは開拓民は三年間の税金免除、一年間の物資援助。状況次第ではもう一年援助を延長することもあるわ。他には、商人や他の職業の方も各種控除を用意してるの」

「それはギリー伯爵領の領民だけですか？」

「どこの領民が来てもそうだけど、宣伝を流してほしいのはギリー伯爵領だけね。おじいさまから、

キャンペーンの受け入れの人数制限はつけられたから」
これは露骨な領民の引き抜きだ。

けれど、ギリー伯爵的には全然問題ないだろう。彼の娘の発言を聞く限りだとね、むしろ、感謝してもらえるかも。

「だいたい、何名くらいをお考えですか？」

「ん？ ギリー伯爵領からの領民は無制限ですけど、他の領地からだ、それぞれ十家族限定ですわね」

「特定領地に対する露骨な領民の引き抜きは、侵略行為と見られて反感を買うと思うのですが」心配そうにチャドさんが言う。

別に、その反感がギリー伯爵家からなら、私はなんとも思わない。

平民に優しくしない方が悪いんだから、自業自得でしかないし。

もし娘だけがねじ曲がった根性をしていて、ギリー伯爵が人格者ならば、移住してくる人もさほどいないはずだからね。

「あそこは、平民をかなり軽く見てるから、いいのではないかしら？ 一緒にいるのも嫌らしいので、むしろ我が家に感謝してくれると思うわよ」

「はあ……学園でジニー嬢と揉められましたか？ ギリー伯爵家は典型的な身分至上主義派閥の一員ですからね。エルザお嬢様とは合わないでしょう」

「よく分かったわね」

「よほど、面白くない思いをなされたのでしょうか」

「すごいなー。さすがは商人さん、情報通だと感心する。」

「いいですよ。あの家は、平民の商人にとってもやりにくい家ですし、意図返しをしたいと思っていたところです」

「本当にどうしてああいう考えになるのか、理解に苦しむよね？ 平民のいない生活なんて、送れるわけがないのに」

「ははは……平民がいなくても、一人で生きていけそうな貴族筆頭の家がレオハート家なのですからね」

「不便この上ないでしょう」

私はそう主張したのだが、チャドさんは不思議そうにする。

「不便……家、魔法で作れますよね？ 食料も……魔法や武力で獣は狩れますし。お嬢様も奥方様も料理は上手ですし、土系統の魔法と時空魔法で農作物も育てられそうですね？ 水の確保や火おこしにも困りそうにないですし」

「そうかもしれないけど、娯楽も楽しめそうにない生活になるわね」

「えっ？」

「ん？」

「いえ、余計なことを申しました。では、早速手の者を使って噂を早急に広めるようにいたしますわ」

ちよっと待って！

チャドさん、いま一瞬魔物狩りが、私たち一族の娯楽になるとか思ったよね？

完全に私の発言に対して呆れた視線を向けて変な声まで出していたのに、何事もなかったかのよう

に辞去^{じきよ}しようとするな。

チャドさんの肩を掴もうとした私の手が宙を切る。

絶妙なタイミングで彼が椅子を引いて、スッと立ち上がったからだ。

そしてチャドさんはそのまま後ろに二歩下がると、頭を押さえて深く頭を下げる。

「それでは、そろそろお暇^{いそま}させていただきます」

「いや、待って！ まだ、話が……」

あっ……逃げられた。

もう！ 許可しないのに退室するのは、貴族に対する不敬罪だと思うよ。

それに、他にも頼みたいことがあったのに……そう、先日の食堂で、ギリ伯爵令嬢と揉めたときに助けてくれた先輩について聞いたかったのだ。

殿下の側近候補であることと、濃紺の髪に黒い目の男性の先輩。

侍女のハルナに話したら、ナミール侯爵令息^{こうしやく}だということは分かった。

でもハルナは『ナミールの刺客』とか『お嬢様に破滅を告げる狡猾な黒い狐^{きつね}』とか、物騒な独り言を零してたんだよね……だから先輩の為人^{ひととなり}と、彼の実家について教えてほしかったのだ。

とはいえ、いなくなってしまったものは仕方がない……チャドさんは役に立つから許してあげよう。全国各地の特産品や面白い事件の話を集めてくる、私専属^{ちようぼく}の諜報部隊^{ていほうぶたい}の要員を集めてくれたのは、実は彼なのだ。彼自身もそういったスキルに長^たけているし。

というか、魔石の代金をまだ払ってないんだけど、いいのかな？

仕方がないから、家の者に王都内にある彼の商会に届けさせるけど。

……わざとかな？

第二話 スペアステージア公爵家

「いたっ」

「何か？」

「……いえ」

クリントと一緒に廊下を歩いていると、同学年の女の子たちにぶつかった。

私に気付いていながら避けるどころか、さらに横に広がってくるとか。

度胸試しのつもりか、私が舐^なめられているのか。公爵一族の私にその態度って、身分至上主義とはいったい何なのか……

「本当に野蛮ね」

「あれでは、殿下も大変そう」

そのまま通り過ぎると、後ろからそんな言葉が聞こえてくる。

学園が始まって一ヶ月ともなると、同じ講義の生徒たちともだいぶ打ち解けることができた。

「全員まとめて掛かってきなさい」

「なんで本来なら護衛対象となるべき令嬢が、戦記に描かれるような闘将みたいなことを言ってるんだ」

剣を下にさげた自然体で片手をクイクイツとして挑発したら、担任のブライト先生に後ろから木剣の腹で頭を軽く叩かれた。

公爵一族の令嬢に、なんたる仕打ち。レディに対するものではないと思いますよ！

「いえ、一対一だと、あまり私の鍛錬になりませんので」

「大人数に囲まれたら、生きて逃げることを最優先に考えなさい」

「攻撃は最大の防御ですよ」

「攻撃は、攻撃だ」

先生が付き合っていていられないと言った表情で、他の生徒に向き直る。

そして手を叩いて、注目を集める。

「まあ、複数の相手との立ち回りも必要なこともあるだろう。護衛対象を守りながら戦う場面もあるから、特殊なシチュエーションを想定しての訓練は悪くない。だが、それは騎士学校や騎士団に入ってから学ぶことで、ここでは剣の基礎が身に付けばいいからな」

そう言って、私の前に集まっていた生徒たちに解散を促した。

ああ……せっかく人間相手の多数戦の手加減の訓練ができると思ったのに。

というか、そもそも一対一で私と組みたがる相手がいないのだ。レイチェルは大人気なのに。

今まで剣も握ったことのなかったソフィアは……実践なんかまだまだ出来るレベルじゃないから、素振り^{すぶり}がメインだし。仕方がない、退屈だし、ソフィアの横に並んで彼女を眺めながら素振り^{すぶり}でもしよう。

とりあえず、最初の一振りくらいは気合を入れて……

「キヤアツ」

「あっ、ごめん」

剣を振り下ろした風圧で、ソフィアが砂埃^{すなぼり}に襲われてしまった。
むう……芝生の上でやるべきだったか。

とりあえず慌てて彼女に謝って、ハンカチで顔を拭^ふいてあげる。

「目に入っていない？」

「だ……大丈夫です」

「なら、いいけど」

周りの目があるから仕方ないのかもしれないけれども、校内だとソフィアはかなり私に遠慮する。態度もよそよしいから、せっかくの同じ講義なのにあまり楽しくない。

そういうば、私の幼馴染で一つ年上のシャルと、ソフィアは面識があった。

入学初日に先輩として色々と、ソフィアの世話をしてくれたらしい。

シャルルは身分至上主義派閥じゃないから、先生も任せやすかったのだろう。

シャルル本人曰く、学園長の指示ではなく、ミレニア王妃から頼まれたとのことらしいけど。

王族はソフィアの出自を知っているから、とりあえずソフィアとシャルルの縁を繋ぐことを優先したのかな？

それか、私が彼女のことを気にしているから、私と仲のいいシャルルに任せたのかも。

彼女は、侯爵家のご令嬢だし……ただ、それとは別に色々とミレニア王妃側にも打算がありそうだけれども。

……それにしても、最近の身分至上主義派閥の子たちは、目に余る行動が多い。

私やシャルルに対しても、ちょっかいを出してくることがあるのだ。

やっぱり、度胸試的な感じだろうか？

身分至上主義を語るくせに、自分たちが原理を侵すようなことをしてどうすると思ったけど。

ただこれには、色々と複雑な事情……という単純な理由があることが、最近分かった。

そう、彼ら、彼女たちのボス、身分至上主義派閥のトップが、公爵家だったのだ。

それは、レオハート家と肩を並べる二大公爵家のひとつであるスペアステージア公爵家。

スペアステージア家の始まりは、初代国王陛下の時代にまでさかのぼる。

当時の第二王子が、初代国王に与えられた家名と爵位なのだ。

いわゆる、完全なる王家の分家にあたる。

そして、その役割は本家である王家の血が途絶えたときに、代わりにステージア王国を治めるということだ。名前もそのままだね。

うちと同じ公爵家ではあるが、その領地の規模は、うちの半分程度しかない。

それに、大した特権を与えられているわけでもないし、莫大な貴族年金がもらえるというわけでもない。

その理由としては、あくまで自然の流れで王族の血が途絶えたときのための、保険だからだ。

王族の地位欲しさにスペアステージア家が変わることを考えないようにと、制限を掛ける意味でも、本来彼らが得るべき力を取り上げた状態だ。

そうなれば、当然不満を抱くだろうし、逆にそのことがきっかけでクーデターを起こされそうなものだ……現に、こうして第一王子の婚約者である私に敵対しているあたり、今がその状態とも言えるだろう。

ただ初代スペアステージア家の当主様も、『王族の血筋が途絶えるということは平時ではなく、代わりとして王に就くその責務は、重大で過酷なものになるだろう。私利私欲でそれを行おうものなら、当家とともに途絶えることになろう』という言葉を残している。

そして、スペアステージア家もそれを家訓として守り続けてきていた。

そんな成り立ちの家なので、基本的にスペアステージアの人間が、外に嫁いだり婿に行ったりす

ることはない。

外から婿や嫁をもらって、国内で別の家名を名乗ることになる。

そして、王族として認められるのは当主ただ一人。

それ以外の人間は、たとえ嫡男であっても、王族として認められていない。

理由は先に述べたとおりなのだけれども……最近そのことに大っぴらに不満を漏らしているらしい。

特に、王家の血筋でありながら、平民と変わらぬ生活を送る末端の者たちの声が大きい。こういった事情なので親族間での結婚も多く、自分たちの血筋こそがもっとも濃い王族の血だと勘違いしているんだとか。

こういった不満が始めたのは、四代前の当主から。

五代前のスペアステージア公爵が割と若くして病死したため、しっかりとした心構えを教育されなかったのだろう。

私の人生からすると結構昔の話だけれども、長い歴史から見れば、本当に最近の話なのだ。

そして、スペアステージア家が不満を持ち始めていることが当時の国王陛下の耳に入り、自身の叔父^{おじ}に立てさせたのがレオハート家だ。

この初代様も、今のおじさまと同じように、当時の国王陛下がもっとも信頼する重臣であり、国の守護者として名だたる武人だったらしい。

そんな方が我が家の初代当主様。

そこに、現国王陛下の叔父であるギースおじいさまが、婿として入った。

だから、血筋としても立場としても、スペアステージア公爵家よりは、強い立ち位置になっていると言えるだろう。

レオハートの家系に王家の血を入れすぎたら、余計にスペアステージア公爵家との溝が深まるのは分かりそうなものなのに。

スペアステージア公爵家が先代国王陛下にそこまでさせるほど、王家からの信用を落としたとも言えるけどさ。

そんなスペアステージア公爵家に、四大侯爵家のうち東の侯爵家であるガシエット家、北の侯爵家であるキタノール侯爵家が近づいているそうぞうで。

彼らも身分至上主義派閥に入っているとか。

スペアステージア領が王都の東にあるから、立地的にそうなるのは仕方ないけどね。

そもそも北の方は、気候の関係で農業や経済など、色々と厳しいみたいで。

あとうちと、近隣のニシエリア侯爵家とレオブラッド辺境伯家は、トナリアーウ帝国とのいざこざで、武功という分かりやすい手柄を立てている。

だからスペアステージア公爵の一派は、私たちに對して、面白くない感情を抱いているのかもしれない。

王家が、レオハートを鼻^{ひいき}肩しているように見えたのかな？

まあ、私たちは公爵家だから鼻^{ひいき}肩されるのも当然だけれども、それに便乗してニシエリア侯爵家が力を持つのをガシエツト侯爵とキタノアール侯爵が嫌がったのかもしれないね。

確かに西側派閥としてはレオハート公爵家を筆頭に、シャルルの実家であるニシエリア侯爵家、うちの遠縁にあたるレオブラッド辺境伯家が派閥をなしているようにも見えるけどさ。

と言っても、こっちは仲がいいだけで、同じような思想のもと集まって結託してるってわけではないし。

本当に近い物同士、仲良くしようという状態。

まあ、調子に乗っているスペアステージアからしたら、関係ないのかもしれない。

ともかくそんなわけで、学園内の身分至上主義派閥の子たちは、スペアステージア、ガシエツト、キタノアール連合軍対レオハート軍という構図を、勝手に描いているみたい。

子どものごっこ遊びにしては規模がでかいし、それで私たちに向けられる嫌がらせの数々は、微^{ほほ}笑^えましくもない。

どこまで調子に乗るか楽しみで放置してる部分もあるし、まともに相手する気はないんだけど、とにかくしつこい。

あえて私に道を譲らないとか、遠目から陰口をたたくとか。

あることないこと、噂話にして私の評価を下げようとするとか。

直接危害を加えてくることはまだないけど、直接的な行動があればさすがに……ちよつとした、地獄を見てもらおうとは思ってる。

夜な夜な大きな口の牙^{きば}の生えた野菜に囲まれて、朝まで呪^{じゆ}詛^そを聞かされ続けるとかどうだろう。

時空魔法の訓練の副産物が、たくさんあるからね……余分な魔力によって変質して魔物化した食物や素材が。

まあ、そんなこと実際にはやらないけどさ。

ともかく、侯爵家や公爵家の後ろ盾があったところで、うちに喧嘩^{けんか}が売れると勘違いしているのが可愛らしい。

私がダリウスから婚約破棄されるんじゃないか、みたいな噂も流れているけれども、婚約破棄されたところで私が王族であることにはなんの変わりもない。

レオハート家は王族のスペアじゃないからね。

スペアステージア家を抑えるための家であり、他国に対する王族の盾でもあるからね。

大事にされているのだよ。

「おい！」

しかし、どうしたものか。

普通に可愛らしい子まで、毒を吐いてくるものだから気が滅入るのは事実だ。

カールみたいに、分かり合えば友達になれるかもしれないのに。

私が馬鹿にされる分には全然問題ないけど、周りに危害が及んだら我慢できないかもしれない。
「レオハート！ おい！ こらっ！」

さてさて、問題になる前に身の程を分かせないといけないのは確実だとして、どうにか正してあげることができれば……

「こらあっ！ 聞いているのか！」

「うるさいなあ、いま、考え事し……て……先生？」

「お前なあ……無心で素振りをずっとしてるから、目の前が酷いことになってるぞ」

ブライト先生に言われて周囲を見ると、私が剣を振り下ろした先の地面がえぐれていた。かなり深く。

そして、私の木剣は柄から先がひび割れていた。

「無意識に力が入っちゃったみたいで。テヘッ」

「ソフィアが怯えて、慌てて呼びに来たから何事かと思ったが……お前は、素振りも禁止だな。今度、上級生のクラスに混ざれないか、相談しておこう」

先生はそう言って、他の生徒のところに戻っていった。

こういうとき、普段だったらクリントが止めに來てくれるんだけど。

今日のクリントは先生の補佐で、同級生の受け稽古の相手役をやらされてたからなあ。

こつちを遠くから見て、呆れているのだけは分かった。

とりあえずイラッとしたので、クリントの方に向かって思いっきり剣を横に薙いでおいた。

「こらあっ！」

あっ……横の軌道だったから、広範囲に風圧が飛んでいったらしい。

先生が遠くからこつちに怒鳴っているのが見えたので、笑顔で手を振っておこう。

普段使いの剣だったら真空刃になって、悲惨なことになってたかも。

気を付けないと。

第三話 全生物平等主義派閥

「不本意だ……」

剣術の授業の翌週、フォークで謎のカラフルな衣を付けられて揚げられている、これまた謎の肉を目の高さまで持ち上げた私は溜息を吐く。

思わず咬いた言葉を、レイチェルたちと一緒に食堂のテーブルを囲んでいるカーラが拾った。

彼女はビクツと肩をはねさせると、こつちをギョツとした表情で見つめてくる。
少し怯えているようにも見える。

「何か、面白くないことでも？」

面白くないこと？ いっぱいある。

身分至上主義派の子たちの増長があまりにも酷いのだ。



伯爵家や子爵家ししやくを巻き込んで、それなりの規模になっている、身分至上主義派閥。

男爵家や準男爵家の子たちは一部を除いて、この派閥には所属できない。

一部というのは、たかが男爵家といえども、脈々と血を受け継ぎつつ、なおかつ財力があり中央での役職において要職についている家系がいて、彼らは派閥に所属しているのだ。

それ以外でただ単に歴史の長いだけの僻地へきちの男爵家の者たちは、いつまでたっても陞爵しょうきやくできない無能と蔑あやうまれているけど。

ともあれ、そんな身分派閥主義派に属する子たちが、我が物顔で人生の春を謳歌おうかしている。

……いや、それも面白くないのだが、今私が腹を立てているのは、他のことについてだ。

まだ学園生活二ヶ月目だからと、ずっと目を瞑つぶっていた。

でもそろそろ我慢の限界だと、ちよつと……ほんのちよつとだけ、本当にかかるべく虐めてやろうかなと、クリントの前で零してしまった。

そしたら、その日のうちにクリントとシャルルが手を組んで、身分至上主義派閥の対抗勢力とな

る『全生物平等主義派閥』を立ち上げてしまったのだ。

全生物平等主義という派閥名は、さすがにぶつ飛びすぎだと思う。ただの皮肉を込めた、身分至上主義派閥に対する当てこすりだろうけど。

この派閥には、ダリウス殿下は特定の派閥に与するのは王族として問題なので関与していないけども、彼の側近から何人か参加している。

ソフィアの件のときに手伝ってくれた、ナミール家の先輩もだ。

短く整えられた髪の毛と、手入れされた眉毛が爽やかさを演出しているが、胡散臭い笑みをよく浮かべているので台無しである。そして彼の身分至上主義派閥に対する視線は、常に厳しいもので、まるで、親の仇かたきかのように睨にらみつけることが多い。

そんな先輩の名前はロータス・フォン・ナミール。

ナミール家は、南の四大侯爵家だ。

こうして期せずして南西派閥対、北東派閥という構図が出来上がってしまった。

国を二つに分断しての勢力争いが、学園内で幕を開けることとなった……壮大な、政争ごっこだね。

背伸びしたい年頃なのかもしれないけれど、もう少し穏やかな対立はできなかったのだろうか。ダンスイ対ジョスイみたいな。

そして何が不本意なのかというと、私がそこに誘われないことだ。なんなら所属すら断られた。

この派閥争いの縮図のようなごっこ遊びに盛大に巻き込まれているのに、私は静観することしかできないなんて。

『エリーは万物平等ではなく、可愛いもの贔屓が酷いから』

『キレると、物理で相手の家を潰しそうだし』

とは、私を愛称であるエリーと呼ぶシャルルト、クリントの言葉だ。他の主要メンバーも頷いていた。

いや、他の主要メンバーは私について、そんなに詳しくないでしょ？ あれ？ なんで、シャルルトとクリントは目を逸らすのかな？ あることないこと吹き込んだのかな？

それを問い詰めたが、二人共首を横に振った。

『等身大のエリーについて、少しだけ物語調で説明しただけですよ』

『嘘はついていないし、誇張もしていない』

開き直られても困るし、勝手に人のことをペラペラと喋らないでほしい。

『とにかく！ 身分至上主義派閥に関してはこちらで対処するから、お嬢は大人しくしてくれ』

そうクリントに言われたけど、現在進行形で私に対する嫌がらせも加速しているんだけど？

私は、どう考えてもこの会の名前のせいだと思うんだ。

そう、この派閥の主要メンバーによるグループは、周りからは、『誇り高き獅子の会』と呼ばれているのだ。

誇り高き獅子の会……レオハート家の存在を匂^{にお}わせる名前だもんね。

でも私はそこにいない。クリントがいるから、名目上は間違いないんだけどさ。

ただ、ちょっと寂しいなってね。

いや、むしろなんかムカついてきた。

……それで、冒頭の独り言に戻るわけだ。



「みんなが、私を除^のけ者にする」

「そんなことありませんよ。剣術の講義の先輩方はみんな、エルザ様に優しく接してくださっていらつしやるじゃないですか」

私の言葉に、カーラが一生懸命気分を盛り上げるように、フォローしてくれている。

けど、違うんだよ、そうじゃないんだ。

私だって、身分至上主義派閥に一泡吹かせたいと思っているのに。

私が学園で除け者にされていることに対する不満じゃなくて、楽しそうな活動に参加できないことに対する不満なんだ。

「ソフィもよそよそしいし」

「あの子は……エルザ様と一緒にいると、迷惑が掛かると分かっているからですよ。だから、あえて距離を置いているんです。身分が違いすぎますし、彼女と一緒にだと、余計に身分至上主義派閥の者たちに侮られますからね」

レイチエルはあまり私の憤懣（ふんまん）に興味のない様子で、素っ気なく現実を突きつけてくれる。

本当に興味がないのか、チラリとこちらを一瞥（いちべつ）ただけだし。

カラフルな衣を付けたお肉の方が、気になってるみたいだし。

それだけ言うと、次々と口に放り込んでるし。

冷たい……

私の表情を見たレイチエルが、呆れたような顔でフォークをいったんお皿の上に置いて、口をナプキンで拭（ぬぐ）う。

「それに……エルザ様がやる気になったら、何を言っても止まらないことはよく知っています。諫（いさ）めるだけ無駄です。我慢の限界を迎えられたら笑顔で見送ることしかできませんし」

違（ちが）った！ 諦（あきら）められていた。

彼女は、どこか遠い目をしながら、そんな言葉を私に向かって呟（つぶや）いた。

確かに色々と楽しい対応を考えて反撃の機（うづか）を窺（うかが）いすぎた結果、いいタイミングを逃してしまったことは否定できない。

でも、やろうと思えばいつでもできるから、先延ばしにただけだし。

なんなら、いまこの場で行動することもできるし。

「それよりも、その揚げ物のお味はどうなのでしょう？」

「相変わらず日替わりメニューだけあって、面白いよ。フルーティで甘味もあって、辛味も苦味もある不思議な味ね。お肉自体はジューシーで柔らかくて、肉の味自体もしっかりと感じられて食べやすいけれど」

先月末くらいから行動を共にしているテレサが、不思議そうに声を掛けてきたので正直に答える。明るめのグレーとベージュの中間色のような髪を、低めのポニーテールで結んでいる細身で筋肉質の陸上系体育会系女子で、深刺（はくし）とした可愛さが特徴の子だ。

食堂でのメンバーは、私とレイチエルとカーラに加えて、このテレサともう一人、フローラが増えた。

この二人は幼馴染で、テレサはレイチエルと同じクラスらしい。

ともに父親が騎士爵を持つ家系の子で、剣術の講義を受けている。

フローラは明るめのアッシュベージュで、サラサラストレートのロングヘアのいかにもお嬢様っぽいお嬢様。なのに、お家柄が剣術の講義を受けているんだよ。

ちなみに、彼女たちの父親が受けた騎士爵という爵位は、領地を与えられない一代限りの爵位だ。もともとは馬に乗って戦う者に与えられていたのだけれど、今は王族を守る近衛の中でも、もっとも重要な騎士や、一騎当千級の手柄をあげた兵士、一部の冒険者に与えられる爵位でもある。

普通の騎士は従騎士とされ、騎士爵は彼らにとって憧れの名誉職、最終目標地点となる。それ以上の手柄をあげれば、土地を与えられて爵位をもらえることもあるけれども、叙爵なんて簡単にあることじゃない。

そしてテレサとフロラのそれぞれの父親は、ともに三代目の騎士爵となるらしい。いや、親の爵位を継いだわけじゃないから、三代目とは言わないか。

三代連続で騎士爵に選ばれた、優秀な人材を輩出する家系というわけである。

たゆまぬ努力と誠実さで、世襲ではない騎士爵に、実力で代々任じられている家なのだ。少し変わった家とも言える。

「ほら、どけよ！　ここは、俺たちの席だぞ」

——そんなとき、遠くから聞こえてきた声に、溜息が漏れる。

振り返ると、おそらく上位貴族の子どもだろう生徒が、他の生徒を押しつけていた。

一気に場が白けるのを感じる。

カーラが怯えた様子で私を見ているけれど、テレサとフロラは少し不快程度。

レイチエルは……食事の方が大事、と。

「窓際の日当たりのいい席に、お前らみたいな下賤な輩が座るなんておがましい」

「身の程を弁えろ」

「ほ……他に、席がなくて」

「ないなら、下に座って食べたらいいだろう」

……よし！　行くか！

「何を揉めている？」

「なんだ、庶子風情が俺たちに文句でもあるのか？」

私が動く気配を察したのだろう。腰を浮かせようとしたら、すでに始まっていた。

少し離れた位置に座っていたクリントが、颯爽と揉め事の現場に向かってしまったのだ。

この流れが、不本意なのだ。

私の意を汲み取ってくれるのはありがたいけど、私のフラストレーションの溜まり具合も汲み取ってほしい。

正直、クリントたちの対応が温すぎて、イライラが少しずつ溜まっている。

私だったら、秒で黙らせることができるのに。

物理的にも……

「お前たちも貴族の端くれなら、少しは上品な振る舞いはできないのか？」

クリントはそう言うが、相手の生徒は鼻を鳴らす。

「何を偉そうに。お情けで公爵家に置かれているだけのくせに」

「本家筋でもなくせに、調子に乗るな。そもそも、先輩に対して失礼だろう！」

いや、クリントはレオハートにとって、本家筋だが？

第二夫人の息子とはいえ、正統なる次期当主の……あー、問題を何も起こさなければ、たぶんだけれども、次期当主になれる予定のお父様の実の息子だよ？

公爵家からしても、嫡男の実子を家に置いているわけで、お情けでも何でもない普通のことだ。それに順番的には私の次にはなるけれど、クリントもしっかりと公爵家の継承権は持っているからね。

考えたくはないけど、私と上のお兄さま二人に万が一のことがあったり、もしくは三人ともが次期当主の座を継ぐことを辞退したりすれば、彼がレオハート公爵になる可能性もある。そうじゃなくとも、おじいさまの持っている爵位のどれかを、もらえるだろうし。

おじいさまであるレオハート公爵から見ても、嫡男の息子でれっきとした孫だからね。

孫可愛いじーじがあなたたちの発言を聞いたら、血の雨が降ることになるよ……ただ、おじいさまは女性と子どもには優しいから、降るとしたらあなたたちじゃなくて、あなたたちのお父さんやおじいちゃんの血だろうね。

というかなんなら、君たちが神輿みこしとして担いでいるスペアステージ家こそ、王家から見たら純然たる分家でしかないんだけど？

どうしてこう、身分至上主義派には馬鹿が多いのか？ いや、意味もなく人を見下すのは、馬鹿だからだろう。

愚者は何者からも学ばずとは、よく聞く言葉だ。

賢者は誰に対しても謙虚けんきょで、学ぶ姿勢をもっている。

自分が足りてないことを知っていて、それを埋めることに対して努力を惜しまない。

歴史から学ぶと言うけれども、経験からも当然学べるのが賢者なのだ。

それを知っているから歴史を紐解ひもとくだけでなく、様々なことを経験したが、交友関係を広く持とうとする。

……まあ、そんなことはどうでもいいか。

しばらく見ていたが、口の回るうえに理屈の通じない馬鹿三人相手に、クリントが劣勢のようだ。

ここは、私の出番かな？

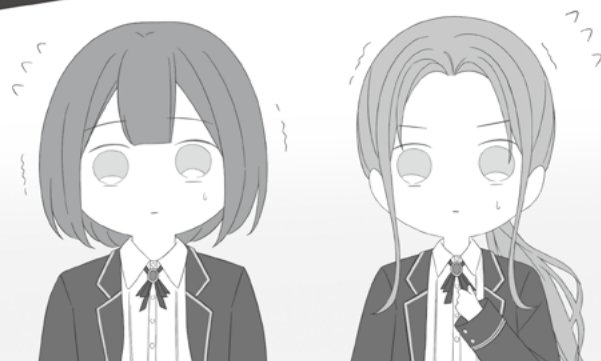
「いい加減になさい。クリント様は、正統なレオハート家の血筋です。父君は、次期公爵となられるレオハート伯爵ですよ。それにクリント様ご自身も、ご兄妹きょうだいと仲がいいのですけれど？」

さあ行くぞ！ と再度腰を浮かせようとしたら、私の横を颯爽と上品かつ早歩きで向かったシャルルが、馬鹿三人とクリントの間に割って入っていき、馬鹿どもの方をびしっと指差した。

騒動が始まる直前くらいに食堂に入ってきた彼女が、しばらく私とクリントの方を交互に見ていたのは気付いていた。

こちらをチラチラと見ていたのは、確認のためか、私に対する牽制けんせいか。

むう……こうなったら何も考えずに子どもらしく「みんなで何してるの？ 私もいーれーてー！」のノリで、乗り込むべきか。



シャルルが加わったことで、多少は動きがあるかと思ったけど、件^{くだん}の子どもたちは不敵な笑みで彼女を見返している。

本当に、向かうところ敵なし状態の勇猛さだな。蛮勇とも言えるけれど。

正当性の欠けた言動で、公爵家と侯爵家を敵に回すなんて、王族でもたぶん無理な所業だよ。私よりも破天荒^{はてんかう}な子が、この学園内にいたなんて。

「ふん、そのような者を庇^{かば}うなど、ニシエリア侯爵令嬢も落ちたものですね」

「何を馬鹿なことを」

しかしながら、本当に随分と今日は調子に乗ってるなあ。

何か、強気に出られることでもあったのかな？

シャルルが心底呆れた表情で、男の子を見下しているけれど。

「聞きましたよ。エルザ様が、ダリウス殿下の婚約者として相応しくないと王城で噂になっているとか」

「婚約破棄に向けての会議が行われるのも、間近だと」

あっ……私のせいだった。色々な意味で。

ごめんね……その噂の出どころ私なだけけど。

そしてそのことを知っているレイチエルと、カラーが気まずそうに私の方を見つめている。

ちよっと、色々とやりたくて用意した下ごしらえの一つだ。

それがいま、事情を知らないクリントとシャルルの首を絞めることになってしまった。その下ごしらえというのは、学園内で一部の馬鹿どもが話していた噂に信憑性を持たせて、敵対する身分至上主義派の連中を一気にあぶり出すというもの。

そのうえで、そんな話はないと一蹴してやろうかなとも思っていた。

ダリウスには予め伝えておいたんだけど、クリントたちには伝えてなかったな……

ちなみにこの噂は、学園内ではなく、ウール商会を通じて王都の一部の貴族たちに流してもらったものだ。主に、お茶会やパーティ好きな身分主義派のお家柄の貴族に。

もちろん、ウール商会が疑われないように、噂をばらまくのは、彼が雇い入れているそっち専門の人たちだけだね。そう、諜報活動が得意な人たち。

ともあれ、あの場をどう収めたものか。

私がそう悩んでいると、いつの間にか私の周りに、よく顔を合わせる、知らない子たちが集まっていた。

彼らは廊下で何度もすれ違ったり、食堂で近くに座ったり、立ち話をしていると、視界に入らないぎりぎりの場所にいたり……という感じで、常に私たちの近くにいる子たちだ。

まあ、さりげなく近くにしようとしてるんだってのは、気配で分かってただけだね。

そして、その子たちが今、クリントたちを取り囲んでいる。

いや、あれはクリントたちの後ろに立ったと言えるかな？

「へえ、それは興味深いね」

「うちでは、そんな話は聞かえてこないけど？」

「ダリウス殿下は、常にエルザ様のことを思い、ご令嬢に相応しくあろうと努力を積み重ねているというのに」

それは、殿下の側近候補の子たち八人のうちの三人だった。

最終的に八人のうちの四人が、ダリウスの側近になるとか。外れた者も、将来要職につくためのエリート街道に進むことを打診されることになる。

現時点で、我が学園の出世頭だね。

八人とも、侯爵家や伯爵家、辺境伯家の子で、家格だけでなく国内の立場でも上にいる家ばかりだ。

そんな三人が言葉を続ける。

「君たちが、殿下の思い人を愚弄したことは、伝えさせてもらおうよ」

「そ……それは」

「そもそもがだ……身分を大事にしたいなら、レオハート公爵家の令息とニシエリア侯爵家の令嬢にまずは敬意を払うべきじゃないかな？」

「口先だけで実の伴わない自分たちに都合のいいルールを、さも名分があるかのような直接的な分かりやすい呼び方でごまかすのは、不正を行う貴族のお家芸だからね」

「陛下にも、君たちの家の者を取り立てる際には、不正に気を付けるように言っておかなければ」
おお、口を挟む隙すら与えずに、三人が脅しを重ねていつてる。
なかなかどうして、口がよく回る。

これ……ダリウス、簡単に言いくるめられたり丸め込まれたりして、将来的に傀儡にされたりして。

というか、都合五対三で人数が逆転したけど、クリントとシャルルはなんの役にも立ってないように見えるな。

「その、家は関係ないと言いますか」

「これは、おかしいことを……家が関係なければ、君たちなんかなんの価値もない人間ではないのかい？ 特に秀でた能力もなければ、生産的なことができるわけでもない。農家や職人、平民以下の存在……いや、家畜以下じゃないか」

言い訳をしようとした子の言葉を、側近候補の一人が遮って言い募る。

「さんざん家柄を盾に横柄な振る舞いを行い、相手を貶しておいてそれは通用しないよ」

「そもそも貴族の子息じゃなければ、ここにすらいないと思うけど？」

「そうだね、お互いに家が関係ないと言うなら、実力で分かせてあげてもいいけど？」

「決闘か……それも、悪くない」

一つ何か言えば、十倍近い反論が返ってきてる。

うーん……殿下は立場上、特定派閥に肩入れしないと云ってるけど……この子たちは殿下が派遣したのは間違いないよね。

まあ、害悪となる派閥相手なら、釘を刺すくらいのことはしても問題ないと思うけど、あまりにも直接的すぎる介入だと思っただ。

ダリウスって、そういう迂闊でいい加減なところあるし。

「別に全生物平等主義派閥に肩入れしたわけじゃなくて、エルザ嬢の身辺警護として送り込んだだけだから問題ないですよ。婚約者のための行動ですから。強いて言うなら、エルザ様に肩入れしている……というか、入れ込んでいますか」

遠くのやり取りを他人事のように眺めていると、私の疑問に答えるかのような言葉が聞こえてきた。

振り返ると、ロータス先輩がまた嫌な笑みを浮かべて立っていた。

相変わらず、いいタイミングで出てくる人だな。

若干、ストーカーっぽい印象すら感じられるよ。

そんな私の内心を察したのか、ロータス先輩は苦笑する。

「あまり信じておられませんか？ 私たちは、エルザ嬢が健やかな学園生活を送れるようにと、殿下に頼まれて陰ながら手助けさせてもらう立場ですよ」

「陰ながらね……」